

女子短大生における充実感と同一性 地位との関係

大 野 久

The Relationship between Fulfillment Sentiment and
Identity Status in Women's Junior College Students

by

Hisashi Ohno

問 題

1 これまでの青年期における充実感研究の経緯

E. H. Erikson (1959) は、自我の心理・社会的発達過程を述べる中で、青年期に達成されるべき主題として、アイデンティティ統合対アイデンティティ拡散を挙げた。ここでいうアイデンティティとは、「自分を自分たらしめている自我の性質であり、他者の中で自己が独自の存在であることを認める（自分は他人と違う）と同時に、自己の生育史から一貫した自分らしさの感覚（自分は自分）を維持できている状態」である（鏞 幹八郎, 1984）。また、アイデンティティの訳語として、自我同一性が一般にあてられていたが、最近の傾向として原語のまま表記することが多い。このアイデンティティの統合の状態とは、独自の存在としての中心的・主体的自我と、社会における役割など、いろいろな側面をもつ周縁的・社会的自我が違和感なく、ひとりの自己の中に統合されている状態である。これに対して、アイデンティティ拡散の状態とは、自分の中のいろいろな自分が統合できず、「バラバラな感じ」、「1つの方向性が見出せない感じ」の自我の状態をいう。しかし、拡散の状態は正常な青年でも一時的に経験することがあり、病的な状態とは一般的にはいえない。また、Erikson がこのアイデンティティの統合を青年期の発達の主題として挙げたことは、青年期がこれまで形成されてきた自我を本人の主体的選択によって吟味しなおし、再統合して成人としてのアイデンティティを獲得する時期であることを示している。

このアイデンティティ理論を発展させ、青年期のしらけ気分をアイデンティティの概念を使って説明したのが西平直喜 (1979) である。この中で、西平は「青年が信頼・自立・連帯を育て、アイデンティティ統合をめざして生きる場合、生活気分は感動、希望、愛情によって活性化され、充実感・生きがい感によって彩られる。一方、不信・甘え・孤立によりアイデンティティが拡散したり否定的アイデンティティに固執する場合、不満、熱狂、失望、憎悪によって生活気分はくしらけ<ものになる」と述べている。また、西平はこの考えを現代青年の心情モデルとして図示した。

さらに、大野久 (1984 a) は、この西平の提出したモデルに関して、調査を実施し、具体的なデータから、このモデルに妥当性のあることを示した。また、この研究の中で大野は以下のことを明

らかにした。基本的に充実感とは健康なアイデンティティを統合していく過程で感じられる自己肯定的感情であり、その内容は次の2つに分けられる。まず第1は、生活気分としてのいわば狭い意味の充実感であり、充実感気分—退屈・空虚感として示される。第2に、その生活気分としての充実感の基盤となるいわばより広い意味でのアイデンティティの各側面としての充実感があり、これは、自立・自信—甘え・自信のなさ、連帯—孤立、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散の3つの内容で示される。さらに、大野は以上の結果を、内容の拡大された心情モデル（図1）に図示した。

また、充実感とアイデンティティ統合の程度に対応のあることを検証するために、大野（1984b）は、充実感測定に用いた充実感尺度と、アイデンティティの統合度を測定する Rosenthal（1981）のエリクソン心理社会的段階目録との相関を吟味し、両者に有意な正の相関をえている。

I Marcia の同一性地位研究

ところで、Erikson の考え方を発展させ、アイデンティティ統合の程度とその統合過程の様相から4つの地位に分けて説明しようとする一連の研究が Marcia（1966）などによって行われている。Marcia は役割の試みと意志決定期間の経験である「危機」 crisis と、人生の重要な領域に対する「自己投入」 commitment という2つの基準から以下の4つの地位に青年を分類している。すなわち、危機を経験し、自己投入もしている「同一性達成」地位、現在、危機を経験中であり、自己投入はあいまいである「モラトリアム」地位、さらに、危機は経験せず、親や年長者などの価値観をそのまま受け入れることによって自己投入している「早期完了、または、権威受容」地位、最後に、危機の経験の有無にかかわらず、自己投入できない、または、自己投入していない「同一性拡散」地位の4つの地位である。この4つの地位のそれぞれのアイデンティティの統合度に関する研究は多々あるが、いずれの研究においても同一性達成地位が最もアイデンティティ統合度が高く、同一性拡散地位が最もアイデンティティ統合度が最も低いことは一貫した結果である。

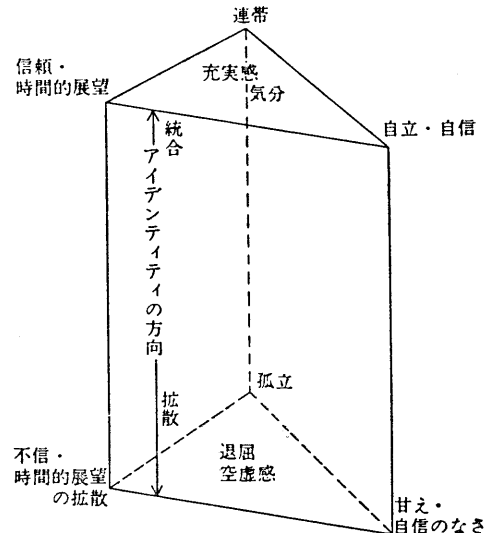
この Marcia の考え方を現代日本青年に適用し、さらに、質問紙調査法の手続きでこの分類を行おうと試みたのが加藤（1983）である。加藤は、「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入の希求」の3下位尺度から成る同一性地位判別尺度を作成し、これに基づいて同一性地位の判別を行っている。

II 本研究の目的

そこで、本研究では、エリクソン心理社会的段階目録との対応においては妥当性が確認されている大野（1984a）の現代青年の充実感に関する内容の拡大された心情モデルの妥当性を Marcia の同一性地位理論からも検討することが主な目的である。

本研究の結果の予想として以下のことが考えられる。まず、基本的にアイデンティティの統合の

図1 内容の拡大された心情モデル
（大野, 1984）



程度と充実感の感じる程度の間には正の相関が考えられることから、アイデンティティの統合度の最も高い同一性達成地位の充実感が最も高いこと、また逆に、統合度の最も低い同一性拡散地位の充実感が最も低いことが予想される。

次に、これは心情モデルの理論からいうと論理的に整合しないのであるが、権威受容地位の充実感が高い可能性もある。これは権威受容地位の青年はうたがうことなく、つまり、主体的な選択なしに親や年長者の既成の価値観を自分のものとして取り入れて、「みせかけの自信」を示すためであり、このことは、Marcia, J. E. & Friedman, M. L. (1970) によって、女子大学生においては権威受容地位の自尊心が最も高いと報告されていることや、Waterman & Waterman (1970) によって、権威受容地位の大学生活に対する満足感が最も高いと報告されていることに示される。こうした現象が自尊心や満足感と概念的には近く位置づけられる充実感でも見られるか否か吟味する必要がある。

さらに、心情モデルに示された生活気分としてのいわば狭い意味での充実感である充実感気分—退屈・空虚感と、それを支えるアイデンティティの各側面を示すと考えられる他の3つの下位尺度が、それぞれどのように同一性地位の得点として示されるか、それぞれの下位尺度の特徴を吟味することによって、現代青年の充実感を感じる構造についてより明確にする必要がある。

方 法

I 被 調 査 者

調査対象は、新潟青陵女子短期大学、服飾美術科1年および2年計35名、幼児教育科2年125名の計160名、いずれも青年心理学受講生である。また、両科のサンプルには関連パターンに大きな差はなかったため、合併して分析を行った。

II 質 問 紙

1 充 実 感 尺 度

充実感を測定するための尺度は、大野(1984a)で用いられた充実感測定尺度のうち、因子分析の結果、抜粋された20項目である(以下、充実感尺度と呼ぶ、項目内容は表1に示した)。充実感尺度は、5項目ずつの4下位尺度、すなわち、充実感気分—退屈・空虚感尺度、自立・自信—甘え・自信のなさ尺度、連帯—孤立尺度、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散尺度から構成されている。また、この尺度は、各項目について「今の自分に非常にあてはまる」(5点)、「今の自分にややあてはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「今の自分にあまりあてはまらない」(2点)、「今の自分に全くあてはまらない」(1点)の5段階評定法で回答を求めた。

2 同 一 性 地 位 判 別 尺 度

同一性地位の判別には加藤(1983)の同一性地位判別尺度を用いた(項目内容は表2に示した)。この尺度は4項目ずつ3下位尺度、すなわち、「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入への希求」の計12項目から構成されている。この尺度の評定方法は「まったくそのとうりだ」(6点)から、「全々そうでない」(1点)までの6段階評定法である。さらに、この尺度では3下位尺度の得点から被調査者を同一性達成地位(以下、Aと表記する、以下同様)、A—F中間地位(AF)、権威受容地位(F)、積極的モラトリアム地位(M)、D—M中間地位(DM)、同一性拡散地位(D)の6つの同一性地位に判別する。判別の具体的手続の流れ図を図2に示した。また、基準値の変更に関しては後に詳述する。

表 1 充実感尺度の項目内容と下位尺度得点との相関係数

下位尺度名	項目内容	相関係数
充実感気分—退屈・空虚感尺度		
	-1. 毎日, 毎日, 変化のない単調な日々でつまらない。	-.70 ***
	5. 生活に充実感で満ちた楽しさがある。	.71 ***
	9. 私は生きがいのある生活をしている。	.66 ***
	13. 毎日の生活にはりがある。	.71 ***
	-17. 毎日の生活に退屈している。	-.68 ***
自立・自信—甘え・自信のなさ尺度		
	2. 私は精神的に自立していると思う。	.43 ***
	6. 私は主体的に生きていると思う。	.49 ***
	10. 私は独立心が強いと思う。	.43 ***
	-14. いざとなるとどうしても人をたよってしまう。	-.31 ***
	18. 自分の信念にもとずいて生きている。	.42 ***
連帯—孤立尺度		
	-3. だれも私を相手にしてくれないような気がする。	-.49 ***
	-7. 私ひとりがとり残されているようで寂しい。	-.60 ***
	-11. 自分がなさげなくいやになる。	-.51 ***
	-15. 私をわかってくれる人がいないと思う。	-.48 ***
	-19. 自分の理想とはかけ離れた今の生き方に焦燥感(あせり)を感じる。	-.40 ***
信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散尺度		
	4. 自分の責任をはたすことに喜びを感じる。	.34 ***
	8. 生まれてきてよかったと思う。	.41 ***
	12. 毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある。	.54 ***
	16. 私には毎日の生活の中でなにかへの使命感がある。	.35 ***
	20. 私は価値のある生活をしていると思う。	.40 ***

負符号は逆転項目

*** P<.001

表 2 同一性地位判別尺度の項目内容と下位尺度得点との相関係数

下位尺度名	項目内容	相関係数
現在の自己投入		
	21. 私は今, 自分の目標をなしとげるために努力している。	.42***
	-24. 私には, 特にうちこめるものはない。	-.47***
	27. 私は, 自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている。	.47***
	-30. 私は, 『こんなことがしたい』という確かなイメージをもっていない。	-.49***
過去の危機		
	-22. 私はこれまで, 自分について自主的に重大な決断をしたことはない。	-.17 *
	25. 私は, 自分がどんな人間なのか, 何をしたいのかということ, かつて真剣に迷い考えたことがある。	.50***
	-28. 私は, 親やまわりの人の期待にそった生き方をする事に疑問を感じたことはない。	-.20**
	31. 私は以前, 自分のそれまでの生き方に自信が持たなくなったことがある。	.31***
将来の自己投入の希求		
	23. 私は, 一生けんめいのうちこめるものを積極的に探し求めている。	.35*** (.34***)
	-26. 私は, 環境に応じて, 何をすることになっても特にかまわない。	- (-.04)
	29. 私は, 自分がどういう人間であり, 何をしようとしているのかを, 今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている。	.43*** (.29***)
	-32. 私には, 自分がこの人生で何か意味のあることができるとは思えない。	-.17 * (-.18 *)

負符号は逆転項目 () 内は項目分析前の値

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

Ⅲ 調査期日および調査手続

調査は1986年10月下旬に実施した。調査方法は講義時間内に一斉調査法で実施した。調査の教示および実施は筆者が行った。所要時間は15分程度であった。

Ⅳ 各測定尺度の信頼性について

表1および表2に示したものが、2つの測定尺度の各下位尺度の合成得点（以下、下位尺度得点と呼ぶ）と各質問項目との相関係数である。各下位尺度得点は逆転項目の得点を充実感尺度では $(6-x)$ 、同一性地位判別尺度では $(7-x)$ で変換して、他項目との方向性をそろえた上で加算した得点である。なお、表1、表2における各下位尺度得点には相関を計算する質問項目自身の得点は加算されていない。

この結果、充実感尺度に関しては、表に示された相関係数がいずれも $|r| = .31$ (0.1%水準で有意)以上の値であり、各下位尺度は内的整合性が高く、十分な信頼性をもつ尺度といえる。

これに対して、同一性地位判別尺度の各下位尺度得点と各項目との相関は、全体的にあまり高い値ではない。特に、将来の自己投入の希求における項目(26)は下位尺度得点と有意な相関がなかったため、今回の分析ではこれを除外した。このため、図2に示したこの尺度による同一性地位判別のための手続における基準値は将来の自己投入の希求において1項目分差し引いた値に訂正してある。

Ⅴ 分析方法

分析方法は、まず、上述した同一性地位判別手続に従って各被調査者を6つの同一性地位に判別した。次に各同一性地位における同一性地位判別尺度、および、充実感尺度の各下位尺度得点の平均値、標準偏差を算出し、各下位尺度ごとに各同一性地位の平均値間の差の検定を行った。検定は各下位尺度ごとに一元配置による分散分析と平均値のすべての組合せについてのT検定を行った。また、2つの測定尺度の下位尺度得点間の相関係数を算出した。

結 果

Ⅰ 各同一性地位の人数

同一性地位判別手続の結果、Aに7名、AFに11名、Fに5名、Mに27名、DMに101名、Dに9名が判別された。

Ⅱ 各同一性地位における同一性地位判別尺度の各下位尺度得点の平均値および各同一性地位の特徴

図2 各同一性地位への分類の流れ図（加藤、1983）

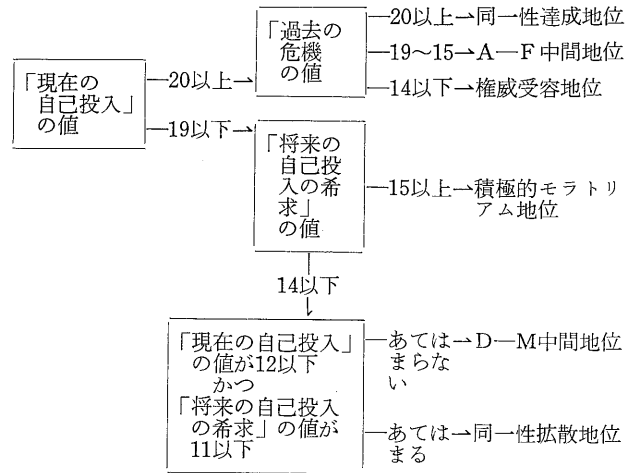


表3 現在の自己投入

	同一性達成地位 (A)		A-F中間地位 (AF)		権威受容地位 (F)		積極的モラトリアム地位 (M)		D-M中間地位 (DM)		同一性拡散地位 (D)		分散分析の結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	21.00	1.07	21.09	1.16	20.20	0.40	16.11	2.68	15.01	2.60	10.11	1.66	***
T-検定の結果													
AF													
F													
M	***		***		**								
DM	***		***		***								
D	***		***		***		***		***		***		

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

表4 過去の危機

	同一性達成地位 (A)		A-F中間地位 (AF)		権威受容地位 (F)		積極的モラトリアム地位 (M)		D-M中間地位 (DM)		同一性拡散地位 (D)		分散分析の結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	21.14	0.64	17.91	1.38	12.60	1.02	18.59	2.84	16.18	3.09	13.44	3.44	***
T-検定の結果													
AF	***												
F	***		***										
M	*				***								
DM	***				*		***						
D	***		**				***		**				

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

表5 将来の自己投入の希求

	同一性達成地位 (A)		A-F中間地位 (AF)		権威受容地位 (F)		積極的モラトリアム地位 (M)		D-M中間地位 (DM)		同一性拡散地位 (D)		分散分析の結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	16.86	0.99	15.27	1.66	12.80	1.94	15.96	1.10	12.09	1.48	8.78	1.62	***
T-検定の結果													
AF	*												
F	**		*										
M					***								
DM	***		***				***						
D	***		***		**		***		***				

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

各同一性地位の同一性地位判別尺度の各下位尺度得点の平均値、標準偏差と分散分析、T検定の結果を表3～表5に示した。

表3に示された現在の自己投入に関しては以下のことがいえる。まず、A、AF、Fの3つの地位が、他のM、DM、Dの3つの地位より、有意に得点が高く、A、AF、Fの3つの地位には有意な差がない1つのグループを形成している。次に、MとDMはA、AF、Fより有意に得点が低く、Dより有意に得点の高い1つのグループを形成している。最後に、Dは他のすべての地位より得点が低いという大きな3つのグループに分けられている。これは、すべての地位の判別に現在の自己投入の得点に関与している当然の結果であり、判別手続の基準値に対応した得点分布である。この現在の自己投入の得点分布を簡単に表現すると、 $A \approx AF \approx F > M \approx DM > D$ となる。

次に、表4に示された過去の危機について以下のことがいえる。過去の危機では、A、M、AF、DM、D、Fの順に得点が高い。 $A > AF > F$ に関しては、判別手続に関与しているので当然の結果である。しかし、判別手続にこの得点がきいていないM、DM、Dに関しても、 $M > DM > D$ の順に得点が高い。また、MとDMの得点はAの得点よりも有意に低い、AFの得点と有意差はなく、F、Dの得点よりも有意に高い。また、FとDの得点に有意差はなく、さらに、他のすべての地位よりもこの2つの地位の得点は低い。つまり、 $A > M \approx AF \approx DM > D \approx F$ となる。

最後に、将来の自己投入の希求については以下のことがいえる。将来の自己投入の希求では、A、M、AF、F、DM、Dの順に得点が高い。 $M > DM > D$ に関しては、この下位尺度の得点が判別手続に関与しているので当然の結果である。しかし、この得点が判別手続にきいていないA、AF、Fに関しても、 $A > AF > F$ の順に得点が高い。また、A、AFの得点とMの得点には有意差はなく、他の3つの地位の得点よりも有意に高い。また、FとDMの得点には有意差はない。さらに、A、AF、Mの得点より有意に低く、Dよりは有意に高い。最後にDの得点は他のすべての地位の得点より有意に低い。つまり、 $A \approx M \approx AF > F \approx DM > D$ となる。

以上の結果から各同一性地位の特徴を述べると以下ようになる。

まず、Aは、現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入の希求いずれの下位尺度においても最も高い得点を示す被調査者が判別されている地位である。次に、AFは、Aと同傾向の得点分布にあるが、Aよりは、過去の危機と将来の自己投入の希求において得点が有意に低い。これに対して、Fは、現在の自己投入だけは高得点のグループに入るが、過去の危機の得点は6つの地位中最低得点であり、また、将来の自己投入の希求でも得点の低いグループに入る。これは、現在、真剣にとりくむものをもっているものの、そこには主体的選択はなく、将来に対してもあまり積極的でない権威受容地位の特徴を示している。

次に、Mは現在の自己投入の得点は低いグループに入るが、過去の危機、将来の自己投入の希求ともに、高得点のグループに属する地位である。これは、現在、青年期における危機、つまり、選択の岐路に立っており、なにか自分の求めるものを追求している最中というこの地位の特徴を示している。

最後に、DMとDは、3つの下位尺度ともに、いずれも低得点のグループに入る地位であり、DはDMよりもその傾向が強い。

このように、6つの同一性地位における同一性地位判別尺度の得点分布の状態を吟味してきたが、判別手続に関与していない下位尺度の得点もあらかじめ想定された同一性地位の特徴に合致しており、判別手続の妥当性を示すものであろう。

Ⅲ 各同一性地位における充実感尺度の各下位尺度の平均値と各同一性地位の特徴

各同一性地位の充実感尺度の各下位尺度得点の平均値、標準偏差と分散分析、T検定の結果を表

表 6 充実感気分—退屈・空虚感

	同一性達成地位 (A)		A—F 中間地位 (AF)		権威受容地位 (F)		積極的モラトリアム地位 (M)		D—M 中間地位 (DM)		同一性拡散地位 (D)		分散分析の結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	19.43	3.11	20.27	3.36	16.40	2.33	15.00	3.89	14.67	3.21	13.00	3.24	***
T—検定の結果													
AF													
F				*									
M		**		***									
DM		***		***									
D		***		***									

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

表 7 自立・自信—甘え・自信のなさ

	同一性達成地位 (A)		A—F 中間地位 (AF)		権威受容地位 (F)		積極的モラトリアム地位 (M)		D—M 中間地位 (DM)		同一性拡散地位 (D)		分散分析の結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	15.43	2.87	18.09	2.07	14.40	3.50	15.78	2.75	14.49	2.75	13.11	1.66	***
T—検定の結果													
AF		*											
F				*									
M				*									
DM				***			*						
D				***			*						

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

表 8 連帯—孤立

	同一性達成地位 (A)		A—F 中間地位 (AF)		権威受容地位 (F)		積極的モラトリアム地位 (M)		MD—中間地位 (DM)		同一性拡散地位 (D)		分散分析の結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	17.86	3.64	18.82	3.19	16.00	1.79	17.89	3.07	17.39	3.43	16.44	3.77	N. S
T—検定の結果													
AF													
F													
M													
DM													
D													

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

表 9 信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散

	同一性達成地位 (A)		A—F 中間地位 (AF)		権威受容地位 (F)		積極的モラトリウム地位 (M)		D—M 中間地位 (DM)		同一性拡散地位 (D)		分散分析の結果
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
	18.86	2.23	20.91	2.35	18.40	1.85	17.52	2.77	16.67	2.44	13.89	1.85	***
T—検定の結果													
AF													
F													
M				**									
DM	*			***									
D	***			***	**			***	**				

*** P<.001 ** P<.01 * P<.05

6～表9に示した。

まず、充実感気分—退屈・空虚感尺度の得点について以下のことがいえる。得点はAF, A, F, M, DM, Dの順に高いが、この中で有意な差のあるものはAの得点がM, DM, Dに対して有意に高く、AFの得点がF, M, DM, Dに対して有意に高い。また、AとAFの得点に有意差はない。つまり、AとAFが高得点のグループを形成しており、これに対して、F以下の4つの地位の得点には有意差はなく、低得点のグループを形成しているといえる。

次に、自立・自信—甘え・自信のなさ尺度について以下のことがいえる。得点はAF, M, A, DM, F, Dの順に高い。しかし、この中で有意差のあるものはAFの得点が高得点の地位に対して有意に高く、Mの得点がDM, Dに対して有意に高い。つまり、AFがきわだって高得点を示し、Mがそれに続いているといえる。他の地位の得点に有意差はない。

連帯—孤立尺度についてみると、この下位尺度においてのみ、分散分析による群間の差に有意差がなく、T検定においてもすべての得点間に有意差が見出せない。

最後に、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散尺度についてみると以下のことがいえる。この下位尺度では、AF, A, F, M, DM, Dの順に得点が高い。この中で有意差のあるものは、AFの得点がM, DM, Dに対して有意に高く、Aの得点がDM, Dに対して有意に高い。また、Dの得点が高得点の地位に対して有意に低い。その他の得点間には有意差はない。つまり、AFからDMまでは徐々に得点が低くなっており、順位の差が広がるにしたがって有意差が見出されている。しかし、AF, A, Fの間、F, M, DMの得点の間に有意差はない。Dの得点は他の地位に比較してきわだって低い。

以上の結果から、各同一性地位の充実感尺度に示された特徴を有意差の示されなかった連帯—孤立尺度を除いて述べよう。まず、きわだつ特徴は、AFの得点がいずれの尺度でも最も高いことである。次にAの得点は相対的にAFの得点に接近して高い。あとは、Mの得点が自立・自信—甘え・自信のなさ尺度において若干高いことが特徴であることを除けば、他の2つの下位尺度において、F, M, DM, Dの順に高得点である。しかし、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散におけるDの得点を除いて有意差はない。

Ⅳ 2つの測定尺度の各下位尺度間の相関係数

充実感尺度、同一性地位判別尺度の各下位尺度間の相関係数を表10に示した。

表 10 充実感尺度および同一性地位判別尺度の下位尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
充実感尺度							
1. 充実感気分—退屈・空虚感	1.00						
2. 自立・自信—甘え・自信のなさ	.40***	1.00					
3. 連帯—孤立	.47***	.22**	1.00				
4. 信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散	.62***	.47***	.32***	1.00			
同一性地位判別尺度							
5. 現在の自己投入	.48***	.51***	.20**	.44***	1.00		
6. 過去の危機	.07	.22**	-.18*	.12	.21**	1.00	
7. 将来の自己投入の希求	.29***	.31***	.09	.39***	.47***	.47***	1.00

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

充実感尺度の各下位尺度間の相関はいずれも有意な正の値で、これは従来の研究（大野1984 a, 1984 b）と同じ傾向を示すものであり尺度の妥当性を示している。

また、同一性地位判別尺度の各下位尺度間の相関もいずれも有意な正の値である。しかし、これは加藤（1983）の結果よりも若干高い。

これに対して、両尺度の各下位尺度間の相関はさまざまなパターンを示している。まず、充実感気分—退屈・空虚感尺度は、現在の自己投入と将来の自己投入の希求に対して有意な正の相関をもつものの過去の危機に対しては有意な相関はない。また、自立・自信—甘え・自信のなさ尺度は、同一性地位判別尺度のいずれの下位尺度に対しても有意な正の相関をもつ。これに対して、連帯—孤立尺度は、現在の自己投入に対して有意な正の相関をもつものの、将来の自己投入の希求に対して有意な相関はなく、過去の危機に対しては有意な負の相関がある。また、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散は、現在の自己投入と将来の自己投入の希求に対して有意な正の相関をもつが、過去の危機に対して有意な相関はない。

以上の結果を同一性地位判別尺度からみると、現在の自己投入と将来の自己投入の希求の2つの下位尺度は程度に差があるものの、充実感尺度の各下位尺度に対して基本的に正の相関関係にある。これに対して、過去の危機は他の2つの下位尺度と異なり、充実感尺度の各下位尺度とは多様な相関関係にあるといえる。

討 論

1 各同一性地位と充実感尺度との関係

まず、狭い意味で定義される生活気分としての充実感である充実感気分—退屈・空虚感尺度の得点と各同一性地位との対応について検討する。仮説では、問題で述べたとうり、アイデンティティの統合度の高いAの地位の充実感気分の高いことや、疑問をもたずに権威を受容するFの充実感気分の高いことが予想された。しかし、本研究の結果、充実感気分の最も高い得点をえたのは、A, AFの地位であった。この結果について、以下に考察しよう。

この結果の原因を明らかにするために、同一性地位判別手続の基礎になっている同一性地位判別

尺度の下位尺度と充実感気分—退屈・空虚感尺度との相関関係に注目する。この相関関係から明らかになることは、まず、充実感気分と現在の自己投入の間にかなり高い正の相関があることである。つまり、基本的に現在の自己投入の高い地位ほど、充実感気分は高いことになる。しかし、現在の自己投入の高いA、AF、Fの3つの地位のうち、予想では充実感が高い可能性もあるとされたFが充実感気分は有意に低い値であった。この原因は、A、AF、Fの3つの地位を判別する手続にきいている過去の危機と充実感気分との対応関係に注目することによって明らかになる。すでに述べたようにFの過去の危機の得点はすべての地位の中で最も低い値であった。つまり、充実感気分の高いこと条件としては、高い現在の自己投入と過去の危機の経験、つまり、主体的選択が必要であると考えられる。

さらに、充実感気分と過去の危機との相関関係について検討しよう。すると、過去の危機の得点が高ければアイデンティティの統合度は高いと考えられ、このことから当然、充実感気分と過去の危機との間には高い相関関係が予想される。だが、本研究の結果、充実感気分と過去の危機との間に有意な相関は見られない。この原因について過去の危機の得点について詳しくみても、過去の危機の得点はすでに結果において述べたように、A、M、AF、DM、D、Fの順に高かった。この中で、充実感気分の高いものはAとAFであった。つまり、過去の危機だけ高いMやすでに述べた現在の自己投入だけ高いFは高い充実感気分をもたないのである。このことは、高い現在の自己投入と、中程度以上の過去の危機を経験しているA、AFにおいてのみはじめて高い充実感気分がえられることを示している。これは、充実感が健康なアイデンティティ統合の実感であるという基本的な仮説を支持するものであり、本当の意味で、アイデンティティの統合に至っていないFは充実感気分を持つことはないことを意味している。そして、上述のMのように過去の危機の得点は高くても充実感気分は高くないというサンプルの存在から、充実感気分と過去の危機との関係が一回帰的に説明できず、低い相関係数として示されたと考えることができる。

次に、生活気分としての充実感をささえているより広い意味の充実感を構成しているアイデンティティの各様相を測定していると考えられる自立・自信—甘え・自信のなさ、連帯—孤立、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散の各尺度と同一性地位判別尺度との関係を吟味しよう。

まず、自立・自信—甘え・自信のなさについて述べる。この下位尺度と同一性地位判別尺度の各下位尺度との相関をみると、いずれも有意な正の相関があり、基本的に現在の自己投入、過去の危機、将来の自己投入の希求のいずれも得点の高いほうが、自立・自信の方向にあることを示している。この結果は、この下位尺度とアイデンティティの統合度との正の相関関係のあることを示すものである。しかし、同一性地位判別手続によって分類された各地位の得点を吟味すると、同一性地位判別尺度の各下位尺度において最も高い得点を示しているAよりも、それに続く得点であるAFの自立・自信の得点が有意に高いという結果である。さらに、有意差こそないがAはMよりも低得点である。このように、相関係数に示された全体的傾向がそのまま各同一性地位の得点分布に示されなかった原因について以下のように考えることができる。その可能性の第1として、同一性地位のサンプルの分布にかなり大きな偏りがあり、かつ、A、AF、F、Dの地位に含まれるサンプル数はかなり少ないので、必ずしも全体的傾向が具体的得点に反映されないことが考えられる。また、第2として、この可能性のほうがより本質的意味があると考えられるのだが、AとAFのそれぞれの地位の特徴に、この現象の原因が現われていると考えることもできる。判別手続において、AとAFは両方とも現在の自己投入が20点以上のサンプルであり、そのうち、過去の危機が20点以上のものがA、19点～15点のものがAFとなる。つまり、過去の危機について強く肯定するAが、中程度に肯定するAFよりも自立・自信をもたないことになる。この現象は有意差こそないが、前述の充実感気分においても、後述の信頼・時間的展望においてもその傾向が示されている。このA

とA Fの逆転現象を両者を分けている過去の危機の違いから考察すると以下ようになる。つまり、自立・自信を肯定するためには、AとA Fを含めて基本的に過去の危機の経験は必要であるが、Aのようにそれを強く肯定する（尺度得点の20点以上は、各質問項目の評定が最高6点に対し平均5点以上を意味する）ことは、主体的選択とはいっても、逆に、自己に対する厳しい吟味、評価を意味するのではないだろうか。そして、この自己に対する厳しい吟味、評価のゆえに前述の充実感気分や、後述の信頼・時間的展望を含めて、無条件に自立・自信を肯定しない傾向が現われているように思える。しかし、この問題に関して結論を出すためには、本研究のサンプルの少なさ、同一性判別手続の基準値の設定の問題を含めて、さらに、資料の収集と検討が必要であろう。

さらに、各同一性地位の得点間に全く差の見出されなかった連帯—孤立について検討しよう。この下位尺度と同一性地位判別尺度の各下位尺度との相関を吟味すると、現在の自己投入と有意な正の相関があるものの、他の尺度と比べるともっとも低い相関であり、将来の自己投入と有意な相関はなく、過去の危機とは有意な負の相関があった。

このように、連帯—孤立と同一性地位判別尺度との関係が低いことについて、以下のように考えることができる。女性の同一性地位研究において、Hodgson & Fisher (1979) は、アイデンティティの統合が、親密性の獲得の前提となる男性と違って、女性の場合、アイデンティティの統合と親密性の統合は並行して進むことを示している。つまり、女性においては、必ずしも高いアイデンティティの統合がなくとも親密性をもつことができる可能性を示している。この意味で、Eriksonの漸成理論における親密性の側面を測定していると考えられる連帯—孤立尺度の得点が同一性地位判別尺度と全体として相関が低いという本研究の結果は、上述のHodgson & Fisher (1979)の結果を支持するものであろう。また、この問題で特に興味深いのは、過去の危機と連帯に有意な負の相関が見出されたことである。つまり、過去において、主体的な悩みや迷いを経験してきた女子青年は仲間とうちとけにくいという結果である。これは、女子青年における比較的男性的な内容をもつアイデンティティ統合と、女性における親密性との関係の一端をかいま見るようで興味深い。

しかし、充実感気分と連帯との相関は以上の現象にもかかわらず高い値であり、充実感をささえる問題として、連帯（親密性）の問題が影響することは否定できない。つまり、充実感は、アイデンティティの統合だけでなく親密性の獲得など全体として健全な人格を基盤として感じられる気分といえる。

次に、信頼・時間的展望と同一性地位判別尺度との関係について検討しよう。

この下位尺度は、同一性地位判別尺度の現在の自己投入、将来の自己投入の希求の2つの下位尺度に有意な正の相関を示しており、信頼感が自己投入の可能であることと高い関連のあることがうかがわれる。また、各同一性地位の得点分布からも、Dの得点が他の地位に比較して有意に低く、上述と同様の傾向が示されている。

また、A Fの得点がAの得点よりも有意差はないが高い傾向についてはすでに考察したとうりである。

Ⅱ 同一性地位判別手続における問題

本研究は、加藤(1983)の同一性地位判別尺度に基づいて、同一性地位の判別を行った。この判別手続は本研究に示されたとうり、基本的な妥当性をもつと考えられる。しかし、今後、さらに検討の余地がある点をあえて指摘するならば以下の点が挙げられる。

まず、第1に、尺度の内的整合性の問題がある。本研究の結果は加藤(1983)の結果から予想されていたよりもかなり低い。これは、本研究の場合、サンプルが女子短期大学の学生という特殊性も影響しているかもしれないが、やはり、現代青年一般に適用できる尺度として考えるならば、さ

らなる資料の収集と項目分析の必要であろう。

第2に、判別手続の結果、各同一性地位のサンプル数にかなり大きな偏りが生ずる点である。これは本研究のサンプルの特殊性が原因ではなく、加藤自身の研究でも指摘されている点である。この現象は判別手続においてMとDに入らないサンプルはすべてDMに入ってしまう流れ図と、判別基準の得点が相対的基準ではなく、各項目に対する絶対的な反応値に従って判別が行なわれる点に原因があると考えられる。このDMにたくさんのサンプルが落ちてしまう現象（本研究で101/160, 63%, 加藤（1983）でも165/310, 53%）に関しては、面接法などによる質的接近からもさらなる検討が必要であろう。

Ⅲ 本研究の意義とまとめ

本研究の結果、まず、生活気分としての充実感気分は、同一性地位の観点からも、アイデンティティ統合の方向にある地位において強く感じられ、アイデンティティ拡散の方向にある地位において低く感じられることが明らかになった。これは基本的に大野（1984 a）の現代青年の充実感に関する内容の拡大された心情モデルの妥当性を示すものである。

次に、従来、充実感気分を感じる基盤を形成していると考えられるアイデンティティのいろいろな側面を示している自立・自信—甘え・自信のなさ、連帯—孤立、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散と充実感気分—退屈・空虚感の相関は常に一貫して有意な正の相関を示し、ややもすると、すべてが同次元に還元される内容をもつ尺度ではないかとの指摘をうけることもあったが、同一性地位判別尺度との対応を検討した本研究の結果、この3下位尺度がそれぞれに多様な関連を示し、各下位尺度が内容的独自性をもつものであることが示された。

特に、連帯—孤立では、これまでどうり充実感気分と連帯に強い関連があることが示されたものの、女子青年において親密性の獲得は必ずしもアイデンティティ統合を前提としないことを意味する結果が示された。これは Hodgson & Fisher (1979) の結果を支持するものである。

以上、検討してきたように、本研究によって、同一性地位理論からも現代青年の充実感に関する内容の拡大された心情モデルに妥当性のあることが示され、モデルの内容についてさらに新たな知見が得られた。

引用文献

- Erikson, E. H. Identity and life cycle : Psychological issues, New York, International Universities press, 1959
- Hodgson, J. W., & Fisher, J. L. Sex differences in identity and intimacy development in college youth, *Journal of Youth & Adolescence*, 8, 1978 pp. 37—50
- 加藤 厚「大学生における同一性の諸相とその構造」*教育心理学研究*, 第31巻 第4号 1983年 292—302頁
- Marcia, J. E. Development and validation of ego-identity status, *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 1966 pp. 551—558
- Marcia, J. E., & Friedman, M. L. Ego identity status in college women, *Journal of Personality*, 38, 1970 pp. 249—263
- 西平直喜「青年期における発達の特徴と教育」大田 堯他（編）*子どもの発達と教育* 6 岩波書店 1979年 1—56頁
- 大野 久「現代青年の充実感に関する一研究：現代日本青年の心情モデルについての検討」*教育心理学研究* 第32巻 第2号 1984年 a 100—109頁
- 大野 久「現代青年の充実感に関する研究（5）：充実感尺度とエリクソン心理社会的段階目録との関係」*日本教育心理学会第26回総会発表論文集* 1984年 b 478—479頁

Rosenthal, A. D., Gurney, R. M., Moore, S. M. From Trust to Intimacy : A New Inventory for Examining Erikson's Stage of Psychosocial Development, *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 6. 1981 pp. 525—537

鎌 幹一郎「同一性概念の広がりとは基本構造」鎌 幹一郎他（編）自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版 1984年 39—58頁

Waterman, A. S., & Waterman, C. K. The relationship between ego identity status and satisfaction with college, *Journal of Educational Research*, 64, 1970. pp. 165—168